

【NHK大津放送局長賞】

家族について

立命館守山中学校1年 川中 雄翔

僕の家族は僕、弟、妹、お父さん、お母さんの五人家族です。家族のうちお父さんとお母さんは耳が聞こえない障がい者です。だからみんなとは違う環境で成長してきました。その環境を紹介します。

僕がまだ幼い頃は、親が障がいをもっているとは気づきもしませんでした。でも保育園に通うようになり、行事の保育参観の時に、僕の親にだけ手話通訳の人が来ていました。その時、自分の親は耳が聞こえないんだと初めて自覚しました。家の中では親と普通に会話をしていたので、一ミリたりとも親が耳に障がいを持っているなど思ってもいませんでした。

しかし小学生に上がってからは、親に対しての疑問が、さらにわいてきました。「どうして僕の親は耳が聞こえないんだろう」「音読とか音楽の宿題を全然きいてくれないの？」でも、今、振り返ってみると、その分、色々な先生が手伝ってくれました。そのため、他の生徒よりは先生とコミュニケーションをとる機会が多かった気がします。あとから知ったことですが、先生が手伝ったり相談に乗ってくれたりしていたのは、親が先生にお願いをしていたからだったそうです。だから僕は上手に音読ができないとか、音楽ができないということはなく、過ごせました。

でも、小学校生活のなかで、とても気がかりなことがありました。それは友達からの視線や声です。ある授業参観の時、「なんでゆうとの親にだけ手話通訳の人が来てんの？」などと、いろんな人に気にされて、とても恥ずかしかったのを覚えています。また、授業参観が終わってからも、たくさんの人からそのことについて言われ、「なんで僕だけなん？」と感じました。保育園の時はそんな思いをしなかったのに、小学校に上がってからは、よく思うようになりました。でも、そんな思いをするのは仕方ないと考えようにもなりました。なぜなら、そのことは僕がどうこうできる問題ではなかったからです。

また、お母さんの声はともかくお父さんの声がみんなの声と少し違うなど気

づくようにもなりました。小さい頃から僕は、一日の中でお父さんとしゃべる機会はたくさんあったので、お父さんが何を言っているのかは大体わかります。けれども、お店に行ったときに注文したり、店員と話す時に、お父さんの話に対してお店の人が「え？」と言うことが多くありました。お父さんの話す声はほとんどの人にはわからないそうです。そのせいか、たまに、お店にしばらくすることがありました。そういう場面に僕がいると、周りから注目されるので、最初はイヤでした。でも、大きくなるにつれ、その声を理解できる僕が天才だなと思えるようにもなりました。それに、お父さんはいつも僕と一緒に楽しいことをしてくれたり、困っている時は助けてくれました。だから僕に対しての周りからの注目を我慢できるようになりました。

しかしそれもつかの間、中学校に行くようになり、親が学校に来た時、「なんでなん？」とまた色々聞かれるかもしれないと気になりました。でもそれは僕にとっての試練になると覚悟を決めました。そこで、先生と相談して、初めての授業参観日の前に、クラスみんなに伝えることにしました。みんな真剣に聞いてくれました。伝えた後、友だちが「そんなの気にする人いないやろう。」と声をかけてくれました。僕は、伝えて良かったと思いました。

今の僕は親のことを隠そうとは思っていません。僕と同じように耳が聞こえない親の間に産まれてきた人に出会って、何か親のことで困っていたら、相談に乗ってあげたいです。また、僕が感じてきたことは、いずれ弟や妹も感じるようになると思います。その時がきたら、僕が小学校で誰よりも先生と話したことで、コミュニケーション力が伸び、それが武器となり、誰とでも話せたり、すぐに友達になれる力がついたことを伝えたいです。障がいがかきかけでいやなことやいじめにあうことはなかったのだと、安心させられる言葉をかけてあげたいです。